



AUE News

2012年1月15日

第 32 号

編集・発行
愛知教育大学広報部会
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500



- 目次
- 省エネニュース@愛教大
 - 行事予定(1月16日-31日)
 - トピックス
 - ・日独交流150周年記念「日本とドイツ人捕虜」展示会
 - ・冬季省エネポスター入賞作表彰式
 - ・天文台一般公開
 - ・企業研究セミナー
 - ・エコキャンパスづくりプロジェクト第1回特別講演会
 - ・花壇整備
 - ・劇団把^o夢第100回公演
 - ・大学入試センター試験
 - お知らせ・報告・投稿
 - ・タイ協定校より洪水見舞いのお礼
 - ・巨大風船を作るワークショップ
 - ・「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム2011
 - ・招へい研究者による第2回講演会
 - ・第2回Aikyo Talking Field
 - ・小中英語支援室英語教育研修会
 - ・第1回LA防災セミナー
 - ・催しもの案内

省エネニュース@愛教大

2011年度愛知教育大学緊急節電対策の啓発活動として、「AUE News」で省エネに関するニュースをお知らせします。今回はNo.14(作成は「省エネワーキンググループ」)です。冬の省エネのポイントを紹介し、皆さん、引き続き、節電にご協力ください。

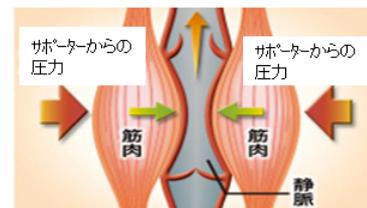
NO14 “温着”でエコ!

冬の節電対策



「厚着から温着へ」

— 高機能衣料 × 節電 = エコで元気に —



● マッスルポンプ増強(イメージ図)
段階着圧が筋肉に働き、血液・リンパの流れをスムーズに

● ふくらはぎウォーマー (レッグウォーマー)

第二の心臓と言われる「ふくらはぎ」を暖めることで、血の巡りを良くし、体温の上昇をはかることができます。

● ふくらはぎサポーター：着圧(インプレッション)タイプ

必要のない筋肉の振動を抑制し、これによって筋肉の疲労を軽減し、血流がスムーズになることにより、「体温の上昇」と「むくみ」が抑制されて疲労から素早く回復する効果が期待できます。

(使用制限の対象者は使用しないでください。)



行事予定(1/16-31)

- 16日(月) 広報部会 (10:00～ 役員会議室)
財務委員会 (15:30～ 第五会議室)
- 17日(火) 役員会 (13:00～ 学長室)
- 18日(水) 第53回教授会 (13:30～ 第一会議室)
- 24日(火) 経営協議会 (10:00～ 名鉄グランドホテル)
- 25日(水) 安全衛生委員会 (15:00～ 第五会議室)
- 31日(火) 役員部局長会議 (13:00～ 学長室)

トピックス

日独交流 150 周年記念「日本とドイツ人捕虜」展示会(1/5-2/3)

「日本とドイツ人捕虜」展が附属図書館 2 階アイ♥スペースで 1 月 5 日 (木) から始まった。



展示されているのは、「OAG ドイツ東洋文化研究協会」が作成し、東京で展示したパネル 20 枚。パネルのタイトルは「150 Jahre Freundschaft Deutschland-Japan」。日本語タイトルは「『我ら皆兄弟とならん』日本におけるドイツ人捕虜 1914-1920」。同協会会員のマイヤー・オリバー・ルードビヒ准教授(外国語教育)が、学生たちにドイツと日本の歴史を知ってほしいと、協会からパネルを借り受けて学内での展示を企画した。

第一次世界大戦下、青島をめぐる戦いの中で日本軍の捕虜となったドイツ人約 4500 人が抑留され、1914 年から約 5 年間、日本各地の収容所で過ごしたが、日本軍は捕虜に対して非常に寛容な態度で接し、良い関係が生まれた。当時捕虜だった菓子職人のユーハイムがバウムクーヘンを日本で初めて焼いたり、音楽家が日本で初めてベートーベンの第九を演奏、日本で初めてのサッカーの国際試合が行われていたり、歴史の中に埋もれていた秘話を紹介。パネルごとに「青島」「拘束」「収容所」「収容所での日常」など 16 のテーマで、写真を多用して分かりやすく解説されている。また、名古屋収容所のコーナーもあり、犬山城の見学や、鶴舞公園での運動会などの写真 30 枚も展示されている。

「明治時代から日本とドイツは交流があり、軍隊や医学などドイツから日本人が学んだことも多く、友好的な関係がありました。捕虜として日本の軍隊の厳しい規律の下で生活していたようですが、自分たちで野菜を育てたり、機会あるごとにパーティーや演奏会を開いたり、当時の進んだ工業技術を日本人に教えたりと、時間を有効に使っていたことが分かります。特に捕虜たちは日本のビールが美味しいと、たくさんのビールを飲んだとあって、私も驚きました」とマイヤー准教授。展示は 2 月 3 日 (金) まで。



冬季省エネポスター入賞作表彰式 (1/6)

冬の省エネを呼び掛けるポスターの学内コンテストの入賞作品が決まり、1 月 6 日 (金) 午後 1 時から学長室で表彰式が行われた。

コンテストは本学の「省エネ推進ネットワーク」が主催。本学学生・教職員、附属学校の生徒、児童、園児を対象に、「冬季の省エネルギーについて」をテーマにしたポスター作品を募集。11 月 9 日 (水) ~ 12 月 9 日 (金) の応募期間中に 5 作品が寄せられ、部局長会議の構成員と監事が審査。入賞は、最優秀賞には本学学生 2 人の共同作品が、優秀賞に附属中学校生徒、特別賞に

財務企画課職員の作品がそれぞれ選ばれた。

表彰式では松田正久学長が受賞者に賞状と記念品を授与。最優秀賞は、江戸時代の暮らしを紹介した文章と昔と今のイラストで「昔の方が省エネだったんじゃない?」と見る人に疑問を投げかけている色鮮やかな CG 作品。受賞した学生は「自分たちがどれだけやれるか、腕試しのつもりで応募。賞に選ばれてうれしく思います」と笑顔を見せた。優秀賞の附属中学生徒は「省エネに関心があったので、応募してみました」、特別賞の職員は「仕事でポスターを掲示することが多いので、僕も応募してみようと。5分でサッと作りました」とそれぞれ、応募の動機などを話した。



受賞作品は今後、学内の掲示、ホームページ、環境報告書などに掲載され、省エネの啓発に役立てられる。(左から最優秀賞、優秀賞、特別賞の作品)



天文台一般公開(1/7)

新年最初の天文台一般公開が1月7日(土)午後4時30分から、自然科学棟で開催された。

第69回となった一般公開。この日は快晴だったものの北風が吹く冬型の寒さ。そんな中でも、金星観測会には37人、天文ミニ講座に51人、夜の観望会に64人の参加があった。



金星観望会は、天文台の40cm望遠鏡で見ると、右側が少し欠けたレモン型に見え、金星が月のように満ち欠けすることに驚いた様子の参加者も。ミニ講座では「暦に隠されたヒミツ」のテーマで、澤武文教授(理科教育)が、私たちが使っている暦の不思議について講演。共和制ローマ時代のカエサルと、彼の死後、帝国ローマの初代皇帝になったアウグストゥスが密接に関係していること、なぜ2月にうるう年を入れるようになったか、なぜ

31日の月と30日の月の入れ方が不規則なのかななどの理由を説明。西暦2000年が400年に一度のうるう年だったこと、英語の月名の由来なども紹介され、多くの参加者が熱心に聞き入っていた。

観望会では木星を観察。40cm望遠鏡で2本の縞模様や、左右に二つずつ、ほぼ一直線に並んだ四つの衛星も観察された。その後も、天王星、ひつじ座のγ星、アンドロメダ座のγ星を見て、無事終了した。

また、国立天文台が開発した宇宙映像のソフト「Mitaka」を使った「3D宇宙の旅」も学生によって2回上映され、多くの家族連れなどが楽しんだ。



企業研究セミナー(1/11,12)

企業への就職を希望する学部3年生と大学院1年生を主な対象にした「企業研究セミナー」が、

1月11日(水)、12日(木)の午後1時~4時、大学会館2階大集会室で開催され、2日間で約300人の学生が参加した。

同セミナーは、学生が企業の採用担当者から直接話を聞くことができる就職支援の催しで、2001年度以来毎年開催し、今年度で11回目。

今年は、2日間で81社の地元有力・優良企業が参加し、ブースを訪れる学生へ企業説明が行われた。



就職環境の厳しさを反映してか、リクルート・スーツ姿の学生たちは、午後1時の開場と同時に、希望する企業のブースを訪れ、採用担当者から企業概要や業務内容についての説明に熱心に耳を傾けていた。両日とも、セミナー終了時刻の午後4時になっても多くの学生が説明を受けていたため、急遽、終了時刻を午後5時まで延長するなど盛会のうちに終了した。

キャリア支援課の担当者は、「学生の希望等を基に参加企業を開拓し、今回も新たにマスコミ、物流、アパレル、化粧品メーカー等の有力企業の参加を得ることができ、学生に会っていただけました。1人でも多くの学生が、このセミナーでの出会いを内定につなげてくれれば」と語っていた。

(キャリア支援課長 三浦孝史)

エコキャンパスづくりプロジェクト第1回特別講演会(1/11)

本学の「環境研究と環境教育の融合によるエコキャンパスづくりプロジェクト」の第1回特別講演会が、1月11日(水)午後1時30分から、第二共通棟で開催された。

講師の、獨協医科大学准教授、木村真三さんは、1986年のチェルノブイリ原発事故によるウクライナ国内の汚染実態や健康影響調査に長年取り組み、1999年に東海村で発生したJCOの臨界事故の調査にも参加した放射線衛生学の権威。演題「原発事故と私たちの環境・健康 ~チェルノブイリと福島から考える~」では、昨年3月11日に発生した東日本大震災で真っ先に福島県入りし、可能な限り福島第一原発に接近して放射線計測を実施した動機や、事故直後の緊迫した状況などが、非常にわかりやすく語られた。なお、そのときのデータには、半減期が1日足らずの放射性同位体のスペクトルまでも見事に検出されており、事故の全容解明に欠かせない基礎データとして、将来、世界的に高く評価されるであろう。事故後、マスコミにも数多く登場し、福島県内外の汚染実態について正確な情報を発信し続けているが、印象的だったのは、場所によってホットスポット(汚染濃度が局所的に高くなっている地域)が点在する理由のヒントに、地域住民の知識が役立ったという体験談である。これは「絆」の重要性を改めて思い起こさせるエピソードといえるだろう。現在、木村さんは、福島県内の道を8000km以上も踏破し、沿線の汚染マップの作成に尽力。また、海洋汚染調査や、食の安全基準の見直し、汚染米の発生メカニズムの解明などについても調査を行っている。こうした取り組みについて、学生、教職員、学外の参加者から多くの質問がなされたが、木村さんは、自分で考えることの重要性を繰り返し力説した。そして、小学生以下の早い段階から、放射線について正しい知識を正確に学ぶことの大切さを訴えた。



2時間の講演会となった。(講演後のアンケートの集計結果でも、回答者の9割以上が「有意義

花壇の整備 (1/12)

本学では、「豊かな自然を活かした環境配慮型エコキャンパスの創造」に向けて環境整備に取り組んでいる。



1月12日(木)には、環境整備の一環として施設課若手職員が企画立案し、大学に提案して採用された「花壇設置計画」に基づき、正門ロータリーから本部に向かうメイン通路歩道脇に花壇を設置し、パンジー、ビオラをはじめ、アネモネ、クモマグサ、プリムラマラコイデスなどの花の苗約200本を植栽した。

当日はあいにくの寒波に見舞われたが、若手事務職員有志を中心に約20人が参加し、シャベル、鍬、つるはしを使い

地面を掘削し、擬木と金具による花壇外枠を組み立て、花壇を設置。花壇には黄色やオレンジといった暖色系の花がバランス良く植えられ、構内の雰囲気有一段と明るくなった。

受験生がバスを下車し試験会場へ向かう途中に花を植えることで、明るい気持ちで試験を受けられるようにという思いも込めて、センター試験前に作業した。

(財務部施設課技術専門グループ 倉橋幸佑)



劇団把° 夢第100回公演(1/14,15)

本学の演劇部「劇団把° 夢(ばむ)」が100回目の公演を、1月14(土)、15日(日)、名古屋市中区大須の「七ツ寺共同スタジオ」で行った。



劇団把° 夢は、1979年旗揚げし、今年で創部から33年目。大学祭、新春、卒業公演など年3、4回の公演し、今回の新春公演が100回目となった。

演目は、鴻上尚史作の「監視カメラが忘れたエリア」。監視カメラで社会を監視することで、人生の歯車が狂っていく矛盾を描いた作品。1、2年生を中心に16人の部員が、演出から舞台づくり、音響、照明などを自分たちで担当し、週に5日の練習を重ねて、本番に挑んだ。

舞台では、新たに映像を使ったシーンや、ダンスや戦闘シーンも盛り込むなどエンターテインメント性も取り入れ、若さあふれる演技で観客を楽しませた。演出を手掛けた田邊充司さんは「100回目の公演ということで荷が重かったですが、お客さんに楽しんでいただけたらと思います。カメラを通してでなく、人の目でとらえることを忘れないでほしい」と話す。また演劇をすることのメリットとして「部員の多くは将来、先生になります。教壇に立って子どもたちに教えるとき、役にたちます」と胸を張る。

舞台は14日と15日で各日2回、計4回開かれ、OBや一般など多くの観客が訪れた。



大学入試センター試験(1/14,15)

大学入試センター試験が1月14日(土)、15日(日)に実施され、本学と附属高校が会場となり、昨年より35人多い3000人の受験生が試験に臨んだ。

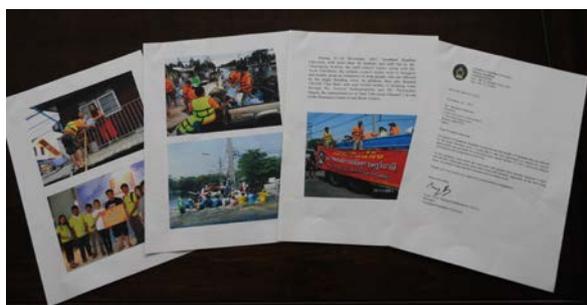
試験室となったのは第一共通棟などの 49 室、附属高校の 17 室、計 66 室。14 日は地理歴史・公民、国語、外国語（筆記）、英語リスニング、15 日は理科、数学①、数学②の試験が行われ、教員と一部大学院生が監督を、事務系職員が答案整理や欠席者調べなどの回収などに当たった。今年は地理歴史・公民と理科がそれぞれ、1 科目か 2 科目の受験を選択できるようになり、両日も時間差をつけて試験開始となった。



両日も、寒さは厳しいながらも雪などによる交通のトラブルもなかった。正門を入った坂道には、高校の先生たちや予備校の関係者が校旗などを手に待ち受け、受験生たちを激励していた。

お知らせ・報告・投稿

タイ協定校からお礼の手紙(報告)



本学の協定校の一つ、タイのラチャパット大学から、昨年秋にタイで発生した洪水被害について本学が送付したお見舞いへの礼状が届いた。

礼状は、スラタニー・ラチャパット大学、チェンライ・ラチャパット大学、バンサムデチャオブラヤ・ラチャパット大学からの 3 通。ラチャパット大学とは 1996 年に学術交流に関する協定を締結し、以来、教員の相互派遣などが続

けられている。昨年 10 月にタイを襲った大雨による大洪水の被害が拡大したのを心配し、本学は 10 月下旬に松田正久学長名でタイの人々へのお悔みの気持ちを伝える手紙を送った。礼状には、各校の学長名で感謝の言葉が述べられている。中でも、スラタニー・ラチャパット校からの手紙には、教職員と学生らが、洪水被害の大きかったバンコックへ援助物資を届けた様子などの報告が添えられていた。

昨年 3 月に日本での東日本大震災には、同大学からお見舞いが寄せられており、互いの交流の深さを示した。



巨大風船を作っているワークショップを開催(報告)



小学生の親子、教職員の方々、そして大学生が協力して巨大風船を作ってその中に入ってみるというワークショップが、12 月 3 日（土）午前 10 時～正午に、豊田市立土橋小学校の体育館で開催された。協力してものづくりを体験する中で親子の絆を深めてもらうことを目的に、PTA が美術教育講座の樋口一成教授に指導を依頼して実施された。活動には美術選修と美術専攻の 1～4 年生 15 人と芸術教育専攻美術分野の大学院生 2 人の計 17 人の学生も参加して、ワークショップを手伝った。



風船づくりに使用したビニール袋は赤、黄、緑、青など 360 枚。切り開いてテープでつないで 1 枚の大きなシート状にした後、半分に折り畳んでから 3 辺をテープで留めて完成。一カ所から扇風機で中に空気を送り込むと、徐々に膨らんでいき、体育館の天井に達するくらいになった。参加者は大きく膨らんでいく巨大風船を外から眺めた後、順番に巨大風船

の中に入っていった。風船の中からは、「わー!」「すごい!」「とてもきれい!」という歓声が響いた。子どもたちは中で走り回ったり写真を撮り合ったりして大喜びだった。参加者は「色がとてもきれいでびっくりした」「みんなの中に入れるとは思っていなかった」と話し、カラフルな飛行船同乗気分を満喫していた。最後に、参加者全員で記念撮影をして活動を終えた。

(美術教育講座教授 樋口一成)



「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム(報告)

2011年12月17日(土)午後1時から、名古屋市内の「ウィンクあいち」で、本学の「リベラル・アーツ型教育の展開」シンポジウム2011が開催された。参加者は50人余で、まずまずの盛会であった。田村建一教授(日本語教育)による開会宣言、松田正久学長によるあいさつの後、シンポジウムのコーディネータであり、プロジェクト責任者である大澤の司会により、第一部の講演会が催された。桜美林大学大学院教授の館昭氏と神戸大学大学院教授船寄俊雄氏の基調講演からなるもので、内容は以下のようなものであった。



館氏の講演は、英語の liberal arts の元来の概念についてのもので、この概念は本来、大学における学科目を大きく二つに分類した場合の、非職業的諸科目を指す概念であり、この概念に基づけば、教員養成系大学のカリキュラムは、そのほとんどの場合は liberal arts と考えなければならないというものであった。これは、日本で混同される「リベラル・アーツ=教養教育」という図式を根本的に破壊

するものであり、専門家ならではの卓見であろう。

船寄氏の講演は、「教員養成教育で学生に身に付けさせたい力」というもので、教員養成の役割とは、自学自習の気風を身に付けさせること、幅広い教科専門教養を身に付けること、幅広い教職教養を身に付けさせること、の三点であると述べられたが、第一点の自学自習の気風および第二点の幅広い教科専門教養を育てることは、船寄氏は一度も「リベラル・アーツ」という言葉を使われなかったにもかかわらず、まさに「リベラル・アーツ型教育」が目指していることに他ならないのではないかと感じられた。



第二部では佐々木守寿教授(情報教育)に司会を交代し、パネル・ディスカッション「教師力を鍛える教養教育とは」が催された。まず大澤による趣旨説明の後、大阪教育大学の前教養学科長横井邦彦氏、本学学長補佐清田雄治氏、本学特任教授山田久義氏が順番に提題された。横井氏の提題は、「科学リテラシーと教養教育」で、現代の教養教育に必要な科学リテラシーの教育とは、ものを考えないマニユ

アル的な人間を、自律的な人間にすることに他ならないという極めて明快な論点が強く印象に残った。次の清田氏の提題は、『「リベラル・アーツ」としての「法的思考」の可能性』というものであったが、現代の学生が最も学ぶべきものは「問題解決能力」であり、それは教員のみならず社会人に必要で、その能力は legal mind (法的なものの考え方) の効用として得ることが可能であり、それは知識の教育というよりは知恵の教育であるという論点は極めて説得力のあるものであった。

最後の山田氏の提題は、十数年に及ぶ校長職のご経験から自ずと滲み出してくるようなお話で、「現場が求めているのは身体も心も健康な教員である」という一言に凝縮された考えは極めて味

わい深く、また対人関係で苦勞されたご経験から、同僚、子ども、保護者とのトラブルをどう避けてゆくの、子どもとの関係の悪化はまさに学級崩壊をきたすのだが、それをどう避けてゆくの、という問いかけは、研究と現場での実践を結びつけて欲しいという希求にも似た結論とともに我々の心に重く響くものであった。このあと、時間一杯までパネリストとフロアとの討論がなされ、一点に着地するというものではなかったにしろ、非常な盛り上がりを見せ、多くの参加者の教育への熱い思いが感じられた良いシンポジウムであった。

(リベラル・アーツ・プロジェクト責任者 大澤秀介)

招へい研究者による第2回講演会(報告)

今年度より本学で開始された「海外協定校からの教職員招へいプログラム」により来日した外国人招へい研究者による第2回講演会が、2011年12月20日(火)、本学の学生会館中集会室で開催された。この講演会は、タイの研究者を講師に迎えて開催された同年11月15日(火)の講演会の第二弾として企画されたもので、中国・東北師範大学教授の谷峪先生、インドネシア・スラバヤ大学准教授 Yoyok Soesatyo 先生、同じく准教授の Nasution 先生の3人が講師を務めた。

講演に先立ち、聴衆として参加した教職員と学生、外国人研究者を代表して松田正久学長が「この機会を有効に活用し、国の垣根を越えた研究活動に取り組むと共に、それぞれの大学と本学との間に、より強固な友好関係を築き上げていただきたい」とあいさつ。各講演者からは招へいに対する感謝に加え、本学と所属大学の交流活性化に邁進して



いきたいとの意欲的な言葉が寄せられた。

谷先生は、中国の社会や文化を中心としたカンントリーレポート、東北師範大学の大学紹介に続き、自身の専門である中国の中等就職教育について解説。自ら職業学校の校長を務める谷先生の分かりやすい説明に、熱心にメモをとる出席者も多く見られた。



続いての講演は、経済教育を研究テーマにしている Yoyok 先生。インドネシアにおける経済教育の現状と課題、それについての解決策を提示するとともに、今回の滞在中に見学した本学附属学校の社会科授業内容の分析に基づき、日本とインドネシアにおける経済教育の比較も行った。

Nasution 先生の講演は、インドネシアにおける歴史教育がテーマ。脱植民地化、国民国家形成を目指した時代のインドネシアにおける「国史」の役割についての解説に、参加者からは当時の日本の歴史背景に言及した質問も多数寄せられた。

最後に各講演者に対して松田学長から労いの言葉と今後の研究活動に対する期待が語られ、講演会は和やかな雰囲気の中、幕を閉じた。

第3回講演会は、タイのラチャパット・チュンライの日本語教師を講師に迎え、2012年1月18日(水)に開催する予定。(教育創造開発機構運営課 国際交流センター 宮内春菜)



第2回Aikyo Talking Field(報告)

学生・教職員参加型FD組織「あいこね」の主催で、第2回Aikyo Talking Field(愛称:A Tフィールド)が昨年12月21日(水)に開催された。この企画は授業や大学生活における様々な課題について、大学の構成員の一員として学生が、教員や職員と議論し、主体的に関わっている場をつくるために行っています。

第2回目は松田正久学長と岩崎公弥教育担当理事も参加、「何なんだこのルール！？～授業と学生生活について～」というテーマのもと、第1回目に引き続き、三重大学・三重中京大学・中京大学からも参加者を迎え、学生15人、教員3人の総勢20人がグループに分かれ、「授業関係」「学生生活」について、ディスカッションしました。

学生生活のグループでは、学生自治会のあり方や大学の危機管理、構内全面禁煙について議論。特に昨年4月から施行された構内禁煙について、たばこにアレルギーがあるという学生から、「全面禁煙になったことで隠れて吸う人がいて、そのせいで前より困っていることもある」という意見が出たことで、「違反者への厳罰が必要なのでは」や「モラルに働きかけることが大事なのではないか」といった議論が交わされました。単に喫煙問題だけに限らず、コミュニティーにおけるルールや人間関係にもつながる議論になったのではないかと思います。

また、授業関係のグループでは、選択できる科目の幅を増やしてほしい、キャップ制はどうして必要なのかといった話題が出され、そもそも大学での学びの目的は何か、真の教養とは何かという議論に及びました。



の会は終了しました。

最後に、各グループの代表学生が議論のまとめを発表してディスカッションを終了。

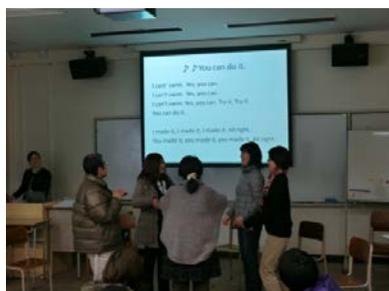
松田学長が「他大学の学生さんとも直接お話しをできる機会を持つことができてよかった。日頃より、学生さんにとって『学びがいのある大学』を目指して取り組んでいます。今回一緒に議論し、指摘された点は真摯に受け止め、さらなる改善に生かしていきたいと思います。学生のみなさんによる主体的な活動が、これからますます広がることを期待しています」と感想を述べ、2時間の会は終了しました。

(教育創造開発機構運営課 満田清恵)

小中英語支援室英語教育研修会(報告)

2011年12月23日(金)、24日(土)に、本学で、教育創造開発機構小中英語支援室主催の教員研修会が行われました。今回の講演会は、発表者50人、参加申し込み者約250人(小学校勤務74人、中学校勤務56人、大学生・院生58人、その他)の大規模な研修会となりました。

同年4月より小学校5、6年生に対し週当たり1時間の「外国語活動」が全面実施されるようになり、また、2012年度からは中学校英語の授業時数は週当たり1時間増加します。本研修会では、大学教員によるワークショップ・セミナーと、また現場教員による発表・報告とで理論と実践を交えた、参加型の研修会となるよう構成されています。また、学校や授業に関する意見交換などを行い、教員同士の連携の場としての役割を担っています。



23日の講演では、松田正久本学学長の開会式あいさつの後、国際教養大学学長の中嶋嶺雄先生が「グローバル時代の英語教育」をテーマに講演されました。

また、ワークショップでは、道木一弘教授、アンソニー・ライアン准教授、アントニー・ロビンズ教授(いずれも外国語教育)、稲葉みどり教授(日本語教育)各専門のワークショップを行い、藤原康弘講師(外国語教育)がコーパスについてのポスターセッション、高橋美由紀教授(外国語教育)が新中学校

教科書についてのシンポジウムを行いました。

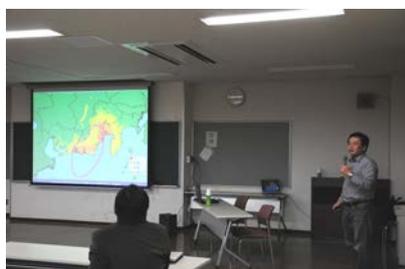
参加者からのアンケートからは「国際教養大学中嶋先生の講演では、日本の英語教育の課題について、歴史的経過も含め話していただき、大変よくわかりました。教養教育の重要性が良くわかり今後の指針をいただきました」（中学校教員50代）「来年は初めて高学年を受け持つかもしれないので、全く何も授業方法がわからなかった私にとって今日の研修会は本当にためになりました。具体的な授業方法も教えていただき本当にありがとうございました」（小学校教員30代）と評価する意見が見られ、実のある研修会となりました。（教育創造開発機構小中英語支援室研究員 小川知恵）



第1回LA防災セミナー(報告)

近い将来必ずや引き起こされる東海地震・東南海地震に備えるべく、災害発生のしくみやその対処方法について学ぶ機会として、本セミナーを企画、昨年12月27日(火)に本学大学会館で開催しました。災害を知り防災することは、自身の身を守るため、また地域コミュニティの一員として重要です。しかし、実際にはその危機管理意識は薄いようです。

昨年3月の東日本大震災を契機に全国的に防災意識が高まっていますが、教員を養成する大学等においては、今後災害時リーダーとしての人材育成も求められることとなります。災害と言っても、自然災害や人的災害があり、実際にはそれらが複合的に発現する事もしばしばです。そのような中で、災害に備え如何にリスクを減らせるか、災害時にはどう行動するべきかを考えるとき、自然科学や社会科学、人文科学の諸分野の総合的な取り組みが不可欠となります。これはリベラル・アーツ型教育の格好のテーマであり、リベラル・アーツ・プロジェクトとしては、本学の教養教育において実現させたいと考えております。



この日は、地球物理学の立場から戸田茂准教授に「地震とは」について講演していただき、地震の基礎的知識および今までの地震災害、今後の地震予測についてわかりやすく解説いただきました。続いて、岩手県釜石市にて東日本大震災を体験された赤崎光男氏(釜石市市議会議員・震災復興特別委員会副委員長)に「震災の体験から学んだこと」の講演をしていただきました。災害現場からのリアルな講演に対し、「被災地に対して何かしたい」「何が求められているか」など多くの関心が寄せられました。講演後も活発な質疑応答がなされるなど、セミナーは盛況でした。

とはいえ、参加者は24人と思っていたよりも少なく、また学生の参加はゼロでした。宣伝不足の感も否めませんが、本学の防災意識を高める必要があると感じました。この企画は今後も継続しての開催を予定しております。

とはいえ、参加者は24人と思っていたよりも少なく、また学生の参加はゼロでした。宣伝不足の感も否めませんが、本学の防災意識を高める必要があると感じました。この企画は今後も継続しての開催を予定しております。



(理科教育リベラル・アーツ・プロジェクト担当 高橋真聡)

催しもの案内

◆招へい研究者による第3回講演会

1月18日(水) 16:00~17:00

大学会館2階「中集会室」

招へい研究者の研究テーマや出身国のカントリーレポートなど。今回の講師はタイのラチャパット・チェンライ大学日本語教師 ポンテープ・スワンナサク氏。

◆第5回リベラル・アーツEduセミナー

「初等・中等教育における対話教育の可能性—教員養成における対話教育の可能性—
—教員養成大学で育むべき力とは—」

1月19日(木) 16:40~18:40

本部棟3階「第五会議室」

対象：大学職員，学生

講師：寺田俊郎氏（上智大学文学部哲学科教授）

土屋陽介氏（日本大学文理学部人文科学研究所研究員・茨城大学非常勤講師）
本学LAプロジェクト主催。教員養成系大学で学ぶ学生が特に身につけるべき力や
その教育方法について意見交換する。初等・中等教育における対話に基づく哲学教
育を研究・実践する両氏が、国内外の教育実践について講演、ディスカッション。
問い合わせ：久保田祐歌さん（LAプロジェクト担当研究員）

TEL 0566・26・2552

ykubota@aecc.aichi-edu.ac.jp

◆育児トーク

1月20日(金) 12:00~12:45(昼休み)

本部棟3階「第二会議室」

昼食持参。自由参加。

次世代育成支援ワーキング主催。職場内で日頃の育児について話し合う機会が少な
いことから、ざくばらんに意見交換ができる会を企画。現在育児をしている人・
していない人、だれでも参加可能。

問い合わせ：施設課技術専門グループ 谷川さん

TEL 0566・26・2158

◆アートで観光まちづくり展

1月21日(土)~29日(日) 10:00~17:00

刈谷商店街ギャラリー「スペースAqua」

商店街と本学の共同事業「Unoセクション」の企画。アートでまちづくりを行
っている佐久島や小渡町の写真や資料を展示。

問い合わせ：村井さん TEL 080・6910・6911

編集後記

趣味と業務を兼ねて(?) 大学構内の作物でオリジナル食品づくりに挑戦。夏の完熟梅ジャム
に続いて、この時期は柑橘類のマーマレード作りです。ユズ、ハッサク、レモン、ミカン、キン
カン…、多彩な柑橘類が実っていて、しかも無農薬。第1弾はユズで甘さ控えめ、香り豊かなマ
ーマレードが完成。トーストに塗ったり、ゆず茶にしたりして試食してもらった女子職員にはま
ずまず好評でした。これも自然豊かな本学ならではの楽しみですが、いつかこの恵みを生かした
“愛教大ブランド”で売り出す日を夢見て、ノウハウを蓄積しなくては。この週末は第2弾のハ
ッサク・マーマレード製造に挑むとします。(K)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュース
の提供をお待ちしております。

メール:kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者:総務担当理事 折出 健二